

総合科目「スポーツ観戦法」

鍋山隆弘, 金谷麻理子, 松元 剛

I はじめに

体育センターでは、平成17年度から平成19年度の3年間、総合科目「スポーツ観戦法」を実施した。この授業では、スポーツは単なる力勝負や技術勝負ではなく知的なゲームであり、スポーツを楽しむには戦術の理解や活用が必要になると仮定し、スポーツ観戦を通して観戦者としての能力を高めると同時に、賢い観衆が賢いプレイヤーを生み出し、より良質のスポーツ文化を生み出していくという構造について理解を深めることを目的にした。

また、本授業では、本学学生および卒業生の活躍する試合を観戦するというのも特徴であり、本学が有する「ホンモノ」の競技スポーツ活動を通して、スポーツへの積極的な関与を促すことも副次的な教育効果として捉えた。ここで言うところの「ホンモノ」とは、筑波大学がかかえる日本を代表する選手やコーチングスタッフを指すものである。学生達にとって身近な存在でありながらも、あまり知られることないこのソフト的価値を、授業における有効な教材として位置づけるものである。

本授業は、スポーツ種目を個人スポーツ、球技スポーツ、武道の3領域に分類し、講義および実習(事前授業および観戦)という形式をとった。本授業の学習目標は、今回設定した学習活動を通じて、各領域のスポーツ種目の特性をより深く理解すること、観戦者というある意味間接的な立場がスポーツ文化の醸成にどのように寄与していくのかということを導き出していくことである。

受講者数は3年間で述べ63名であった。筑波大学は平成17年度に総合科目についての学生による授業評価を行ったが、その結果を見ると、受講生全員がこの授業に積極的に参加していたようである。特に「この授業により新しい知識や考え方を修得でき、さらに深く勉強したくなった」という質問項目においては、受講生全員が「大いにそう思う」、「そう思う」と回答しており、受講生にとって興味深い授業が展開できたといえる。

以下では、各スポーツ領域において実施した授業の内容と、その授業によって導き出されたスポーツ観戦の意義について、受講生のレポートの記述(『』で示す。)に着目して述べていく。

II 授業内容

1. 個人スポーツ

①事前授業

事前授業では、個人スポーツの競技特性や魅力、観戦の仕方や観戦する試合の見所を理解することを目的とした。平成17年度は陸上競技を専門とする教員(宮下憲教授ならびに谷川聡講師、いずれも体育センター)が、平成18年度は体操競技について金谷が、教室において講義を行った。平成19年度は、体操競技の特性をより深く理解するために総合体育館体操競技場に場所を移し、実習形式で行った。この実習では、実際に器具を用いて体操競技を体験するとともに、いくつかの種目におけるデモンストレーションを間近で見ることによって各種目の運動特性や採点に関する基本的なルールを理解しようとした。

②観戦

平成17年度は陸上競技における「セイコースーパー陸上競技大会2005横浜」(日産スタジアム、以下「スーパー陸上」)を、平成18年度および平成19年度は体操競技における「全日本体操競技選手権大会」(国立代々木競技場第一体育館、以下「全日本体操」)を観戦した。「スーパー陸上」は、2005年の大会で18回目を迎え、その年の世界大会で活躍した世界のスーパースターが参戦するとともに、国内のトップ選手および各種目における将来有望な若手が参加する見応えある試合である。また、「全日本体操」は、国内の各年齢カテゴリー(社会人、大学、高校、ジュニア)における試合の上位者のみが参加することができ、団体、個人総合、種目別の各競技における日本チャンピオンを決定する試合である。

観戦当日は、平成17年度の「スーパー陸上」では、陸上競技のさまざまな種目を観戦するとともに、この大会に役員として参加していた本学教員の配慮により、サブグラウンド見学や専門家による解説、競技終了直後の参加選手による講義など、通常の観戦では体験できない貴重な体験をすることができた。平成18年度および平成19年度の「全日本選手権」では、本学の体操競技部員とともに筑波大学の応援席で観戦した。この場合、体操競技を専門とするTAや体操競技部員の説明を受けながら、現場でしか感じるこのできない臨場感を味わった。

③観戦レポートから

各競技の観戦後には、個人スポーツを観戦する際に観戦者に必要となる能力とは何か、競技の運営方法や応援の仕方、会場の雰囲気等の視点から見た個人スポーツの特徴とはどのようなものかを、それぞれのレポート課題とした。

以下では、平成19年度の観戦後のレポートから、多くの受講生が共通して感じた体操競技観戦の特徴について代表的な意見を取り上

げて考えてみたい。主な内容は、1)競技の運営方法、2)観客への競技の進行状況に関する情報提供の仕方、3)会場全体の雰囲気である。

1) 競技の運営方法

『選手をいくつかの班に分け、男女合計10種目の運営を同時に行うことは運営側にとっては都合がよいのだろうということはわかった。しかし、観客としては同時に何人もの手が演技に臨むためにどこを観たらいいのか、何を観たらいいのかわからないのでだんだん退屈して眠くなる…というケースが多いのではないか。』

例えば、野球では、投手が投球し、それをバッターが打つ。そして、そのボールを捕球して、その間にランナーが走って…というように、ボールの動きにあわせて観客全員が着目するポイントがおおよそ同じである。しかし、体操競技の場合はレポートにもあるように、競技中には男女の選手がそれぞれ種目と同時に演技を行うために、競技を楽しむためには、どの種目に誰がいて、どんな演技(技)をする、あるいはその選手が何点を取ったら勝つ、といった情報を個々の観客が独自に収集、分析をして、見る対象を選択しなければならないのである。この場合、当然のことながら、採点のルールをある程度理解していることが前提となる。

2) 観客への進行状況に関する情報提供の仕方

『解説・場内放送や、現在何と言う選手が何の種目を演技しているという表示さえないので、素人の客が見てもよく分からないように思う。TVなどで見ている場合は、有名選手や注目選手だけをクローズアップして映すため、選手はかなり注目を浴びているように見えるし、選手名が表示されたり、解説が流されるため、あまり気にならなかったが、実際の会場で見るとものすごく違和感がある。』

体操競技では一度競技が始まったら、各選手の演技の得点は表示されるものの、それ以外観客に対する情報提供は皆無に等しい。仮にあったとしても、場内の大型スクリーンに種目ごとの順位の変動が表示される程度である。これは、体操競技の勝敗がすべての選手が演技を終えなければ確定しないことや、その都度の場内アナウンスが他選手の演技実施の妨げとなる可能性があることなどに関連している。

3)会場全体の雰囲気

『私はバスケットボール部に所属しているのですが、バスケットボールの試合会場のような熱気はなく、みんな淡々と練習している姿が印象的でした。しかし、その中にもピリピリとした雰囲気があり、見ているだけで緊張しました。』

『体操競技のように、同じタイミングで、同じ言葉でエールを送っているのはとても驚きました。』

体操競技の競技会場には独特の静寂と緊張感が漂っている。これは、体操競技がチームスポーツのように一つのプレーを成立させるために、もしくはチームの志気を高めるために選手同士で声を掛け合いながらプレーするようなものではなく、個々の選手が静かに順番を待ち、自分の出番になったときに準備してきた演技を思うように実施できるかどうか勝負であるため、このような独特の雰囲気が生まれるのであり、それゆえ応援の仕方も独特なのである。

2. 球技スポーツ

①事前授業

事前授業では、各年度の受講生のほぼ全員がアメリカンフットボールの観戦が初めてであったために、アメリカンフットボールのルールをもとに観戦の仕方や観戦するゲームの見所を解説し、球技スポーツの競技特性や魅力について、技術・体力・戦術の観点から

理解することを目的とした。平成19年度は、アメリカンフットボールの特性をより深く理解するために、総合体育館体バスケットボール場に場所を移し(雨天のため)、実習形式で行った。この実習では、アメリカンフットボール部の協力のもと、基本的な攻撃プレーをデモンストレーションしてもらい、そのプレーを守備側の位置から観察することとした。実際のゲーム観戦は、スタジアム上方からになる。そのため、俯瞰的にプレーの様相を観察することになるが、事前に選手の視点からのプレーを観察をすることで、そのプレーのスピードやパワーを感じることができ、選手の立場でのプレーのリアル感を体験することで、観戦がより現実的なものとしてできるように配慮したものである。

②観戦

各年度、社会人アメリカンフットボールのリーグ戦であるXリーグから、IBM対鹿島、シーガルズ対富士通、IBM対オンワードスカイラク戦を観戦した。いずれのチームも日本を代表するトップチームであるとともに、鹿島、IBM、シーガルズにおいては筑波大学出身者が選手やコーチングスタッフとして関わっていることもあり、これらの試合を観戦することにした。また、観戦場所についても天候に左右されることなく、安心して観戦できるように東京ドームでの試合を抽出した。

観戦当日は、筑波大学出身者のいるチームサイドからの応援観戦を行った。この場合、アメリカンフットボールを専門とする教員やアメリカンフットボール部員の説明を受けながら、現場でしか感じるることのできない臨場感を味わった。平成17年度および18年度においては、IBMおよびシーガルズのチームスタッフの協力のもと、試合前後においてチーム運営の状況に関わる講義を行うこともできた。

③観戦レポートから

観戦後には、球技スポーツを観戦するポイ

ントは何かを課題とし、観戦の感想とともにレポートにまとめるよう指示した。以下では、観戦レポートから、受講生が共通して感じた球技スポーツの観戦の特徴について述べる。主な内容、1)観戦のための前提条件の必要性、2)戦術的観戦の醍醐味、3)試合会場の演出である。

1) 観戦のための前提条件の必要性

『競技についての知識をある程度は頭に入れておかなければ予測ということはできないので、競技について勉強することも大切だと思う。』

『授業を受けるまではアメリカンフットボールについてほとんど何も知らなかった。ルールは思っていたより複雑ではなく、授業での映像とプリントで観戦に必要な知識は得ることができた。』

受講生はアメリカンフットボールの試合観戦がまったく初めてであったため、事前授業において、基本的なルールと反則、および攻撃の仕方について理解が深めたことが、試合観戦を容易にしたことがうかがい知れる。多くの受講生が述べているように、その競技についての基本的知識やルールの理解は、観戦のための前提条件として共通のものと考えるべきである。

2) 戦術的観戦の醍醐味

『観戦するポイントは、やはり次のプレーがどうなるかということをも自分なりに予測してみることだと思う。』

球技スポーツにおけるゲームの中核は戦術行動にある。事前授業では、球技スポーツに共通する競技特性を技術面、体力面、心理面、戦術面の4つの観点から説明した。中でも、戦術行動について、「ボールを操作する技能」(on the ball skill)の観点から見ると、種目によってその構造はすべて異なっているものの、「ボールを持たない動き」(off the ball movement)に着目すると、各種目間での関連性は深く、種目を超えて動き方の転移が生じ

ることを解説し、このことをアメリカンフットボール観戦の主な着眼点とした。これによって、当日の観戦が有意義なものになったと同時に、球技スポーツにおける戦術的な駆け引きについて理解が深まったように感じる。

3) 試合会場の演出

『アメリカンフットボールでは、試合はもちろん試合以外のパフォーマンスにおいても観客を楽しませており、アミューズメントの要素を前面に出している。』

『チームカラーのものを身につけることや、ユニフォームを着るなどすれば、会場や他のファンたちとも一体感を得ることができると思う。』

『チームの目標やスローガンも知っていることなども見て取れるようになる。そのためにもパンフレットや横断幕に目を通してみるのもよいと思う。』

東京ドームでの試合であったため、音楽、照明、チアリーディングなど他の競技スポーツに比べて、華やかな要素が多いことに驚いた受講生も多かったようである。最初は躊躇しがちであった応援も、プレーの理解の深まりとともに、熱気を帯びてきた感じであった。会場に入る際に配られたパンフレットや応援用スティックなどのチームが観戦者のために準備している応援グッズや、よりチームとの一体感を高めるチームカラーの重要性についてのコメントも多く、観戦者の能動的な態度が試合の質を高める会場全体の演出の一役を担っているということであらためて認識したようであった。

3. 武道

①事前授業

平成17年度および平成18年度は、過去の映像を用いながら、剣道の見方について理解を深めようとした。しかし、この方法では剣道

を見慣れていない者にとっては、たとえスロー再生を繰り返しても、打突部を打突しているかどうかの判断が難しく、「一本」を見極めることは困難であったため、平成19年度は剣道場においてデモンストレーションをまじえて説明を行うことにした。さらに、やはり打突や勝敗の判断ができるようになるまでには時間がかかるので、観戦は試合の流れを感じ取った上で打突の機会を探ることが大切であり、「一本」を見極めるといふ強い意志をもって最後まで見ることをあきらめないことが剣道を見る上で重要であることを特に強調した。

②観戦

観戦は、3年間すべて「全日本剣道選手権大会」(日本武道館)であった。平成17年度および平成18年度は、全日本剣道連盟の配慮により、まとまった場所での一回戦からの観戦(約7時間)となった。しかし、長時間では受講者の集中力が保てていないと感じたため、平成19年度は後半戦から決勝戦までの観戦(約3時間)となった。

当日は、剣道をより深く理解するために、鍋山とT Aが試合の流れや繰り出される技について、できる限り説明しながら観戦を行った。受講生の様子を見ていると、やはりはじめは「一本」の見極めは難しかったようで、集中できていない者も見受けられた。しかし、決勝戦が近づくにつれて、「一本」が見えた受講生も現れて、他の観衆同様に高度な技や素晴らしい技さばきには拍手する受講生も出てきた。

③観戦レポートから

観戦後には、観戦の感想を中心に、日本の伝統文化の影響を強く受けている剣道そのものについて、レポートにまとめた。以下では、観戦レポートから多くの受講生のレポートに見られた共通の内容を挙げて、剣道の特徴について述べる。主な内容は、1)伝統的な行動様式、2)剣道における「心」のあり

方、3)「一本」を見抜く力である。

1) 伝統的な行動様式

『剣道なんて堅苦しくつまらないものだと思っていたが……。武士道が存在する日本ならではの心が常に選手の中にあることがその行動から伝わってくる。その独特の張り詰めた緊張感は、前まではただ堅苦しいものであるとか、ちょっと厳しくて怖いものだと思っていたが、武道館に一步足を踏み入れた瞬間、その緊張感がすごく伝わってきて、鳥肌が立つほどのものすごく感激してしまった。』

剣道に対して「堅苦しい、厳しい、怖い」といったイメージを持っている日本人は、少なくないと思われる。レポートにもあるように、今回の受講生もそう感じていたようだった。しかし、試合場に足を運び、実際に観戦して、武士道が存在する日本ならではの行動からくる独特の緊張感を感じて、感激していた。剣道は作法に厳しく、形、礼儀を重んじる。それゆえ、すでに述べたようなイメージをもたれがちであるが、実際はそれを守り戦っている姿は美しいのである。

2) 剣道における「心」のあり方

『プレッシャーなど重圧に打ち勝つために自分とも闘っているような気がした。』

『実際に観戦して思ったことは、選手は5分間の試合だけでなく、防具を着けてからはずすまですっと緊張感を保ち、相手と常に向き合い、何度も礼をしていたことから、剣道はどのような状況においても相手を思いやり謙虚な気持ちで相手と接する競技だということだ。』

剣道で大切なことはまず己に勝つことである。優勝をする選手でも「一本」を取ってリードすると勝ちを意識して剣道が変わってしまうことがあるくらい、精神面が現れやすい競技である。また、同時に剣道を志す者は、相手への配慮を怠らないという礼節を重んじる姿勢や潔さを信条とする武士の精神性を強く

受け継いでおり、そのような「心」のあり方が個々の選手の剣道に如実にあらわれる。およそ3時間という限られた時間の中で、剣道における「心」を感じ取っていた受講生もいたようである。

3)「一本」を見抜く力

『剣道の試合を生で観戦するのは初めてだったので、最初はなかなかどちらの選手が一本を取ったのか見極めることができずに苦労したが、先生のアドバイスや説明のおかげで、なんとかどちらが一本を取ったのか、どこを突いたのかを見極めることができるようになった。どのスポーツでもそうだがルールが理解できるようになると、そのスポーツを観戦するのが楽しくなる。』

剣道は、初心者が試合の勝敗を観戦者自身の力で判断することが難しい。受講生は事前授業で行ったアドバイスによって、どちらが優位に試合を進めているのか、どのようなタイミングでどんな技が繰り出されているのかなど、およその試合の流れを理解することができ、何回かは「一本」の見極めができたようである。ただし、どんなに集中して見えても、かなりの経験を積まなければその見極めは難しく、やはり初心者にとっては観戦の満足度は低くなるのではないかと考えられる。

Ⅲ 学習の成果

『テレビなどのメディアを通してスポーツを観戦するのと、自分の足を競技場などに運んで直接自分の目でスポーツを観戦するのでは、ぜんぜん違うということだ。決定的な違いは会場の雰囲気や直に自分の肌で感じることができた。』

このレポートの記述は、本授業の学習成果を端的に示している。3回のスポーツ観戦を通して受講生がまず感じたことは、メディアを通しての観戦と現場での観戦では、また、スポーツの種目によって競技場の雰囲気が、

まるで異なるということであった。

本授業では受講生に対して、このような直接的体験学習を通してスポーツ観戦の意義を問いかけ、最終授業でのディスカッションとともに、各自で最終レポートとしてまとめることにした。以下では、最終レポートに基づいて4つの観点から、スポーツ観戦の意義について述べる。

1. 選手と観客の相互作用

『スポーツは選手と観客が一体と成立するものである。観客のいないスポーツは存在しない。したがって、選手は観客を大事にする。観客と選手がある時間を共有し、感動や爽快感を得る。その感動や爽快感を得るために人々は熱狂し、惜しまない応援や資金を出す。』

『スポーツは肉体的な速さとともに、頭の回転の速さも求められる。一瞬一瞬が重大な意味を持つ、それがスポーツの醍醐味である。そしてその速さについていくだけの目の肥えた観客があれば、自ずと選手のパフォーマンスレベルも上がっていくであろう。高いレベルの観客が高いレベルの選手とともにすばらしい試合を創っていく。』

ここでは、選手と観客との双方向的な作用を指摘するものが多く見られた。観客が選手にとって応援という観点で不可欠な存在であると同時に、選手のパフォーマンスに多大な影響力を及ぼしていることが推測される。これは本授業の開設のきっかけとなった「賢い観衆が賢いプレイヤーを生み出す」というキーワードを支持するものであり、スポーツ観戦のための前提条件として、どのスポーツ領域の種目であっても、それぞれの専門的知識と試合を「見ることができる」という能力を身につけていることが、観戦者にとって不可欠となる。

2. スポーツ(試合)の場の醸成

『大勢の観客が取り囲む緊張感のある試合は選手に大きな集中力とパワーをもたらす。その雰囲気は選手に精神力の強さも要求する。つまり、集中力・パワー・精神力を選手に与える、それが観客というものだ。』

『スポーツにおいてそのよい緊張感をもたらすには、観客の雰囲気合わせが求められる。その競技についての知識があり、暖かい心でもってその場の雰囲気を盛り上げる。それが選手にパワーをもたらし、よりエキサイティングな試合が展開される。』

『場の雰囲気作りは、選手の中に秘められたパワーを引き出す。記録を期待して会場全体が手拍子に包まれる。そうかと思えば一瞬にして静寂に包まれる。ワンプレーごとに大きく上がる歓声。勝利したものを称え、割れんばかりの拍手。こういったものが選手に集中力と底力を与えるのだ。観客がいるからこそそのパフォーマンスである。』

すでに述べた双方向的な作用とも通じるころではあるが、スポーツ(試合)の場を構成する一員としての役割意識がそこには存在する。当然のことながら、3つの異なったスポーツ種目の観戦を体験する中で、それぞれのスポーツには独自の場・雰囲気が存在するという事も理解したものと考える。これは、メディアを通じて与えられたスポーツに関する情報からはうかがい知れぬものであり、観戦者自身がスポーツの現場に身を置いた場合にのみ体験可能なことなのである。

3. 生涯スポーツへのつながり

『スポーツ観戦するという意義は、そのスポーツを知り興味を持つための近道である。』

『わずかな知識しかないままにその種目を観戦した私達が、観戦が終わる頃にはその競技に引き込まれ、魅力を感じていた。』

『授業を通して今までに知らなかったス

ポーツに出会えることができた。それぞれのスポーツについて今までより深くすることができ、スポーツに対する視野が広がったように感じる。これを機にこれからも積極的にスポーツ観戦の機会を増やしていきたいと思う。』

これまで接する機会がなかったスポーツについて、スポーツ観戦をすることで興味・関心をひく受講生が多く見受けられた。今後、ますます多様化するスポーツ活動の中で、スポーツ観戦が生涯にわたってスポーツに親しむひとつのきっかけとなりうると考えられる。このことは、大学体育の教育目標とも通じるころがあり、従来のスポーツを実践する体育に加えて、本授業で取り上げた「スポーツ観戦能力」を養成するような、スポーツとのあらたな関わり方を提案する授業を展開していくことは、体育における教育活動をより充実させていくと考えられる。

4. スポーツビジネスへの展開の可能性

『スポーツを観戦することで、そのスポーツに対して興味がわく。そしてその興味がそのスポーツを発展させる。スポーツが発展すればビジネスにもつながるのではないか。』

『スポーツ観戦はスポンサー企業にも影響を与える。企業がチームや選手、大会のスポンサーになるのは観戦する人がいるからである。スポーツ観戦者は競技場の広告や選手の着用品に興味を持ち、それらの商品を購入する。インターネットやテレビでのスポーツ観戦する機会が増えたことにより、企業のスポンサー効果は以前より高まる傾向にあるのではないか。スポーツ観戦と企業との関係がより密接になったといえるであろう。』

スポーツ観戦者を消費者としてその立場を見ると、そこにはビジネス空間が広がってくる。消費行動は、一般的に形あるモノを購入することと理解されているが、スポーツの場合、その本質は形のないモノ、すなわち観衆

の目の前で繰り広げられ、一瞬にして消え去る試合そのものに価値を見出す。この試合という商品はまた、再現性のないものであり、二度と再現されないその現象を直接体験することにこそ、その価値が存在するのではなからうか。また一方で、正しい知識に基づく確かな観戦能力を身につけた観戦者が、スポーツの本質をとらえた上で観戦することによって、さらに試合の価値を高める。こういった正のスパイラルが、スポーツビジネスというスポーツ文化のあらたな一面をさらなる発展へと導いていくのである。

IV おわりに

本授業では、「スポーツ観戦」という人とスポーツとの関わり方の中で比較的新しい側面にスポットをあて、実際にスポーツ(試合)の場へ足を運んで「スポーツを見る」という直接体験を通して、そのことの文化的な意義についてのディスカッションを試みた。

スポーツ観戦そのものが、単に娯楽としての活動にとどまることなく、スポーツ文化の創造へ大きく貢献しているものとして捉えられる。このことは、すでに述べた選手と観戦者との双方向的な作用や観戦者もつスポーツ(試合)の場の醸成のための役割などからうかがい知ることができる。また、今後さらに人々の生涯にわたってのスポーツとの関わり

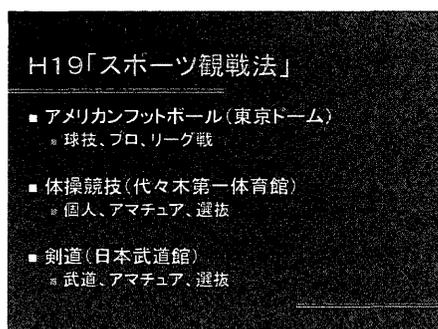
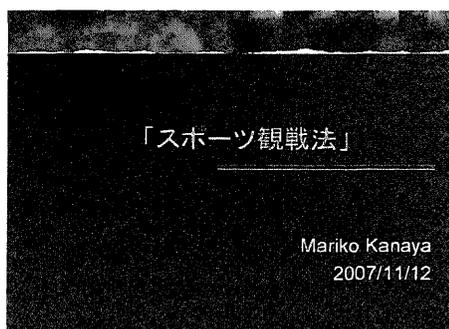
方が多様化したり、経済界におけるスポーツビジネスの位置づけがより明確になったりすれば、スポーツ文化の継承・創造に向けたスポーツ観戦者の存在意義はますます重要になるであろう。

以上、本授業の試みによって、これからの大学体育にとっても多くの示唆を得ることができたように感じる。ただし、この授業実践を行うにあたり、最後まで課題として残ったことがある。それは、スポーツ観戦をする「場」の問題である。身近な「場」としてその存在が、この国では大きく欠けているように思われる。受講生のレポートの中にも次のような内容のものがあった。

『実際の観戦にはさまざまな問題がある。まずは費用の問題だ。次に場所の問題もある。』

同じく大学スポーツが盛んな米国においては、スポーツ観戦に耐えうるだけの施設を大学内に有している現実がある。そこには多くの学生達が同じ境遇で学ぶ学生達のスポーツ・パフォーマンスに触れ一喜一憂している姿がある。これは大学における教育サービスとしてのスタンダードと言っても過言ではない。これからの大学における体育・スポーツを通じた教育において、ソフト面の充実とともにハード面の整備の必要性は、この授業を通してあらためて認識した一面でもある。

表1 平成19年度最終授業における資料



テーマ①

- スポーツ観戦の方法について
 - ライブ
 - テレビ、ラジオ、インターネット
 - 新聞、雑誌

テーマ②

- スポーツを見るにあたって、観戦者に必要なことは何か
 - 競技特性やルールの知識
 - チームや選手に関する情報
 - 試合の位置づけの理解

テーマ③

- 「見る」スポーツのあり方について
 - メディアとの関係
 - 先立つものはやはり・・・
 - スポーツの本質とは

「する」スポーツと「見る」スポーツ

- 「する」スポーツ
 - 参加型スポーツ
 - 1960年代、スポーツ振興法の制定や東京オリンピック
- 「見る」スポーツ
 - 観戦型スポーツ
 - 戦前の活字メディアから戦後のマスメディアへ
 - 1990年代、Jリーグの開幕

スポーツ産業の3領域

- スポーツ用品産業
- スポーツサービス・情報産業
- スポーツ施設・空間産業

チーム・ロイヤリティ

- チームへの愛着心あるいは忠誠心
 - 自分の応援しているチームが勝つことによって生じる優越感
 - 自分が帰属しているものとの対立
- チーム・ロイヤリティを高める要因
 - 居住地域と出身地間
 - 選手と観戦者との距離
 - 観戦機会の拡大
 - 観戦満足度

「見る」スポーツの発展

- 「産業」から「文化」へ
 - 景気や流行に左右される
- 「経済的な豊かさ」の創造から「心の豊かさ」「文化的豊かさ」の創造へ
 - スポーツのビジネス化の中で、文化としてのスポーツ振興にいかに関与していくか

最終レポート課題

- スポーツにおける観戦者の存在意義について、スポーツ文化の醸成という観点から述べよ。
 - 締め切り：2007.11.16(金) 17:00
 - 提出場所：体育センター事務室前レポートBOX
 - 形 式：A4枚数自由